

## はじめに

校務の情報化は、比較的新しい概念であると言ってもいいであろう。教育の情報化が、情報教育を推進する上での基本的な概念であり、その中に児童生徒の情報活用能力を育成する「情報教育」と、教科の目標を達成するためにICTを活用する「教科におけるICTの活用」が、よく知られた目標であった。しかし、その教育の情報化に「校務の情報化」が含まれていることは、あまり注意を払われなかった。たしかに、「校務の情報化」が教育の情報化に含まれていることは知られていたが、視点が情報教育と教科におけるICT活用に焦点化されていて、注目されていなかったことが現実であった。さて、その「校務の情報化」が昨今、何故重要視されてきたのであろうか。

その1つは、ネットワークの急速な進歩である。教科におけるICTの活用は、わかりやすいので、学校現場にも受け入れられてきた。それは、黒板や掛け軸と同じようにICTを道具として活用して、わかる授業を目指すという目標だからである。ネットワークがあってもなくても本質的な差は顕在化しないが、校務の情報化ではそれが直接に影響を与える。校内における教育情報がネットワーク上で処理されることになれば、ネットワークリテラシーが教員に要求される。教員1人が努力してわかる授業を目指すというわけではなく、ネットワークは他人が関わる環境であるから、教員自身の情報活用能力がきわめて必要になる。

2つは、学校がきわめて重要な個人情報を扱う機関だという認識である。成績や進路情報だけでなく、性格や家庭環境などの決して他機関では扱わない個人情報を、教育という目的から読み書きしてもよいという委託を受けている。それが、もし外部に漏洩したら大きな問題を生じることが、容易に理解できよう。ネットワークなどで処理しようとするれば、どうしても基本的なリテラシーを身につけておかなばならない。

3つは、「校務の情報化」は早く正確に処理するという情報の効率化だけでなく、教育の情報化、すなわち教育活動の質的な改善に関わるという認識である。「校務の情報化」と聞いて、成績処理のことかと思うならばそれは間違いである。教育活動そのものに強く関わっていることを本報告によって理解していただきたい。

本報告書は、文部科学省の委託事業「校務情報化の現状と今後の在り方に関する研究」として、日本教育工学会が受託し、膨大な調査と海外も含めた多くの機関への訪問調査によって作成されたものである。本委員会は、2つの作業部会に分かれて活動したが、それぞれの部会長である赤倉、藤村両委員をはじめ、多くの委員の多大な努力によって作成された。また、調査に協力していただいた多くの関係機関、訪問調査にお応えいただいた教育委員会の関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

調査研究委員会 委員長 赤堀 侃 司